
IS <インフィニット・ストラトス> 切り札の白騎士と欲望の赤巫女

1 2 J o k e r

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> 切り札の白騎士と欲望の
赤巫女

【Nコード】

N0035W

【作者名】

12Joker

【あらすじ】

これは一夏が子供の時仮面ライダージオーカーで篤が仮面ライダーオーズになった時、世界はどうなるんだろうと言う物語。

タイトルも設定も大幅に変更しました。

プロローグ1

一夏「うわあああああああ！」

僕は織斑一夏、10才です。僕の家族は今千冬姉だけです。両親は僕達を捨てました。

今、怖い人達に追われています。

学校の帰りに誘拐されて研究所みたいな所にいます。何とか隙を見て逃げ出だけどもバレて追われています。

僕は部屋の1つに逃げ込んで、部屋の鍵を掛けました。千冬姉助けて……。

ふと僕は部屋の真ん中に ある机の上にあるアタッシュケースを見つけました。中を開けてみると、何だろう？赤いバツクルみたいなのと、USBメモリみたいなのが13本、あとブレスレットがある。

僕はバツクルみたいなのを持つと、急に動き出して腰にベルトのようになった。ドカン！！

鍵が壊され怖い人達が入ってきた。

「おい君！それは、」

「今すぐそれを離しなさい！」

近寄って来る人達に僕は慌てて黒のUSBメモリのスイッチを押してしまった。

『ジョーカー！』

メモリから発した声がそのメモリをこのバツクルに挿入しろと言ったような気がした。

一夏「うわあああああ！！！」

僕はメモリをバツクルに挿入し展開した。

『ジョーカー！』

織斑一夏から発した衝撃波が大人達を吹き飛ばした。

この事件は公にされていない。 5年後、少年織斑一夏は女性にしか使えないパスワードスーツ、IS<インフィニット・ストラトス>を何故か動かせるようになる。

これは織斑一夏が世界で唯一ISを動かせる男であり、世界でただ2人の仮面ライダーの内の1人となった物語である。

プロローグ1（後書き）

取り敢えず、2つ目の作品です。頑張ります。

プロローグ2

篤「はあ、はあ、はあ……。」

私は篠ノ之篤10才。私の大好きな幼なじみ織斑一夏と離れ離れになり10日程過ぎた頃です。IS装着している女の人に追われて逃げています。

篤「うっ、痛い……。」

私は剣道の稽古の帰りだった為、袴を履いており、走りづらく、途中で転んだからあちこち擦り傷だらけだ。

私は博物館みたいなところの倉庫に逃げ鍵を閉めた。

篤「一夏あ……、助けて……。」

私は泣いてしまい、そこにうずくまってしまふ。こんな時に一夏は必ず助けてくれたのだ。私はそれから一夏以外には何故かあまり関心が無くなってしまい、一夏と離れ離れになった元凶の姉さんでさえも怒りや憎しみが沸かなくなった。私は一夏が好きな欲望しかない女なのか……。

？「おい、小娘。泣くな。」

篤「え？」

声が出たからそつちを見てみると、棺があつて、そこには、3枚の赤いメダルが宙に浮いて周りの銀色のメダルが集まり、赤い翼みたいなのが付いた腕に変わった。

ドカーン！

女「見つけたわ。さあこっちにおいで。」

女の人がドアを壊して入ってきた。

？「アン？誰だ？」

女「腕が喋っている！？」

女の方は驚き赤い腕に攻撃したが、腕は平然に受け止めた。

女「なっ！？」

？「ほうっ、この女が纏っているのが世界最強の兵器だと？笑わせるー！」

女「ぐっ、なめるな！」

？「ぐっ！！」

赤い腕は弾き飛ばされたが、壁に激突する前に私がキャッチした。

？「小娘、なんで俺を？」

箒「私は箒。篠ノ之箒だ。助けるのに理由がいるか？」

？「ちっ、そうかよって箒、お前が首に提げているのは俺のコアじゃねーか。」

箒「えっ、これは3日前に庭に落ちていたから拾ったんだ。」

?「しかもタカのメダルかもしかすると・・・箒!」

腕は長方形の石板みたいなのを取り出すと私の腰に当てた。石板はヒビが入りそこから光が漏れだしたと思ったら、3つ横に並んだ穴があるバツクルみたいになり、ベルトが現れ私の腰に巻かれ左側にメダルが入りそうなケース、右側には円盤みたいな物が取り付けられていた。

女「なっ!?!何それ!?!」

?「女、そんな変な鎧が世界最強だと思っていたら痛い目見るぜ。さて箒。」

箒「はっ、はい!」

?「俺達が助かる方法はただ1つ、あの女を倒すしかない。お前が首に提げている赤のメダルをバツクルの右側、この黄色のメダルを真ん中、緑のメダルを左側に嵌めろ。」

腕は黄色と緑のメダルを出し、首に提げている赤いメダルとバツクルを指差した。

箒「どうなるんだ?」

?「このメダル・・・コアメダルの力が解放されお前にメダルの力を与える事が出来る。お前は一夏と言う男に会いたいのだろ?だったらこの力を使い、一夏とやらと再会しろ。」

女「ダメよ！そんな得体の知れない奴の事を信じる気！？」

？「さて、どうする？」

第「1つ聞かせてくれ。名前は？」

アंक「俺の名はアंक。9枚のコアメダルを核とした人工生命体『グリード』だ。」

第「アंक、この使い方を教えて欲しい。」

アंक「はん、いいぜ。」

私はアंकからメダルを受け取ると、右手に赤いメダルを左手に緑のメダルを持ちバツクルの両側に嵌め、最後に右手で黄色のメダルを真ん中に嵌め込んだ。するとバツクル右側が上に来るように傾いた。

アंक「これを使ってメダルをスキャンしろ。」

アंकはベルトの右側にあった円盤みたいなのを私に握らせ、バツクルに滑らせるようにスキャンした。

『タカ！トラ！バツタ！ タ・ト・バ タトバ タ・ト・バ』

私は自分の姿に驚いた。頭は赤でタカの翼が広げたような感じなり胴体は黄色で両腕にはトラの爪みたいな鉤爪みたいなのが折り畳まれ、足はバツタを思い出させるように緑のラインが出ているのだ。一番驚いたのは胸部は円形状になっており、上からタカ、トラ、

バッタのスキャンした順番のメダルのイラストが刻まれていた。

箒「何だこれは？タカにトラにバッタ？それに今の歌って・・・？」

アंक「歌は気にするな。それは仮面ライダーオーズ、タトバコンボだ。」

箒「オーズ、タトバコンボ・・・。」

アंक「さあ箒、思う存分闘え！俺が指示してやる！」

箒「わかった。」

それから女の人を倒しアंकと一緒に逃げ、何とか家に着いた。

それから5年後、少女篠ノ之箒はIS学園で最愛の男織斑一夏と出会う。ここにもう1人の仮面ライダーが誕生した。

5年後、世界が動き出す。

第1話 試験とISと切り札

事件から5年後 一夏side

2月のある朝、俺織斑一夏は学費も安く、卒業後の就職先も保障してくれる私立藍越学園の入学試験を受験するために試験会場に電車に向かっていった。

金銭的に迷惑掛けたくなくて、千冬姉に中学卒業したら働くと言ったら、アイアンクローと言う名の強引な説得によって、藍越学園を受験する事にした。千冬姉には『あの力』を使っても勝てる気がしない……。まあ、生身の人間には使うつもりはないが……。

つと、目的の駅に着いたから、降りて試験会場に向かう。この試験会場は様々な高校の受験するために貸されているらしい。俺は気合いを入れて藍越学園の試験会場を目指した。

1時間後

か、完全に迷った……。
何、この会場？無理矢理進んだら二度と出られなくなるカラクリ屋敷か何か？

よし！次の扉が試験会場だ。
まあ、俺の直感がよく当たる方だから、大丈夫だろう。
俺は勢いよく扉を開けた。

「あつ、君受験者だね。あつちで着替えてきたね。」

試験官の人は手に持っている空中投影のディスプレイを見ながら、俺に指示を出した。

カンニング防止の為だろうな。俺は更衣室であろう部屋に入った。

そこには『鎧』みたいなのがあった。

これはISだ。

IS、正式名称インフィニット・ストラトス。宇宙に進出する前提で作られたが、今では各国の主要兵器となった女性にしか使えないパワードスーツ。

俺の『力』と同じく世界最強の兵器。

このISがこの世界を女尊男卑の世界に変えた。

けど、俺の『力』はそれ以上に強力な物で、現にISに乗った誘拐犯を逆にその『力』で、返り討ちにした。その後千冬姉にはその『力』を使うのは極力控えるように言われた。

話が反れたが、ここにISがあるという事はここはISの操縦者を育成するIS学園の試験会場だろう。

俺はすぐに出ようとしたら制服の内ポケットに入れていた俺の『力』の1つ『ジョーカーメモリ』がISと反応し、共鳴した。

俺は体が勝手に動き出して、ISに触れた。

ISから空中投影のディスプレイが大量に現れたが、それを見ることなく、俺にはISの全てが理解できた。

そのままISは俺に装着された。

「君！何しているの……って、ええ！？」

「こっつ、これは大変だ！！」

試験官の人達が来て慌てていていたそりゃそうだ。男なのにISを動かしたからだ。

その後、連絡を受けた千冬姉が来てくれて俺は試験官達に検査を受けされる前に俺を連れて帰った。

その後からだ。家に各国の代表代理の人や研究員達が押し掛けて来るようになった。

それから暫くして3月中旬、千冬姉がIS学園であろう制服を俺に渡した。

一夏「千冬姉、やっぱりこれって……。」

千冬「ああ、IS学園の制服だ。すまない一夏、私がもっとしっかりしていれば……。」

一夏「いいんだよ。千冬姉は悪くないから謝る必要はないよ。それよりも検査の時、俺の『力』がバレなかっただけでも幸いしたよ。

「 千冬「一夏、分かっていると思うが、お前の『力』は……。」

一夏「分かっている。この『力』はIS以上で更に世界の均衡を崩しかねない力。だったら、俺はこの『力』を俺が関わる全ての人を守る力になりたい。国家や政府達の戦闘マシンにはならない。なりたくない。」

千冬「安心しろ。私がお前を戦闘マシンになんかさせない。私がお前を守る。」

一夏「だったら俺も千冬姉を守る。」

千冬「そうか、それだったら精進しろ。この5年間のように。」

『求めよさらば与えられん』だ。」

一夏「ああ！」

俺は決めた。IS学園で千冬姉と同じく最強のIS操縦者となる。ISとこの5年間で鍛えた俺の『力』……『仮面ライダージヨー

カー』の力と共に俺の関わる全ての人を絶対に守って見せる！

第1話 試験とISと切り札（後書き）

ヒロイン達は少しオリジナルを入れようと思います。

第2話 剣道少女と赤い腕と近き再会（前書き）

短いです。

第2話 剣道少女と赤い腕と近き再会

箒 side

アंकと出会い私がオーズになってから5年後、私篠ノ之箒はやはりIS学園の入学は決定されていた。

アंक「箒、やはりISは憎いか？」

家には私と私の隣にいる宙に浮いている赤い腕がアंक、2人（？）で住んでいる（他の人はアंकには見えないらしい）。

箒「私は一夏が好きなき事以外は殆ど関心を持たなくなってしまう。だから姉さんやISには何の感情を持つ事が出来ないから本当は憎みたいのに憎めないんだ……。」

アंक「そうか……、（これこそが箒がコアメダルの暴走を抑えられる理由なのかもな。）」

箒「アंक、本当に私なんかをオーズに選んで正解だったのか？」

アंक「ふん、お前のお陰でコアメダルは一通り手に入ったし、セルメダルも大量に稼げたし、お前が持っているのと合わせて俺は後1枚で完全復活する。」

アंकは私の首に下げているタカのコアを見る。

箒「それにしても7枚でも右腕しか復活しないなんて……。」

アंक「それでもお前を選んだのは俺にとっては得だった。間違
いなくな。」

篤「こっちこそ私に力をくれてありがとう、アंक。」

そう話していたら一夏が世界初ISを動かした男として取り上げ
られ、IS学園の入学が決まったとのニュースが出た。

アंक「篤、よかったな。一夏とまた会えてよ。」

篤「ああ！」

待っててくれ一夏、今度こそ私の思いをぶつけて見せる！

第2話 剣道少女と赤い腕と近き再会（後書き）

次はちょっとした番外編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035w/>

IS <インフィニット・ストラトス> 切り札の白騎士と欲望の赤巫女

2011年10月28日11時06分発行